

---

# 誘惑がもたらすもの

せんまだい

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

誘惑がもたらすもの

### 【Nコード】

N1925C

### 【作者名】

せんまだい

### 【あらすじ】

平凡な日常を送っていた主人公。ある日通勤電車で見たものは。

ある蒸し暑い朝だった。私は会社に出勤するために自宅から十分程の駅から電車に乗り込み会社へと向かった。

大抵は朝の通勤ラッシュであったので私が乗り込んで五分ほどするほど違う路線からこちらの路線に乗り換えてくる人達で電車の中はまるで身動きが取れなくなる。

私は丁度車両の中央部にいたので前後左右をスーツ姿の男性や女性、これから学校を向かうであろう学生等にしっかりと挟まれていたものであるから、私の体はまるで歯車の一部であるかのようにしっかりと固定され、身動きが取れなくなっていた。

その状況ならば脱力しても倒れることは無いので、いつも家から小説などを持参して私の勤務先がある駅までゆらゆらと電車に揺られながら時を過ごしたりしていた。

しかし今日は少しばかりいつもより、寝坊をしてしまいあわてて家を飛び出してきたものだから小説を鞆に入れることなどすっかり忘れていた。

しかたなく窓の外の景色などぼーっと眺めているが人と人の隙間から見える景色はまったく情緒を覚えず、私はしばしの間目を閉じることにした。

目を閉じてしばらくすると何やらまぶたの上に何か違和感を感じた。

それはすぐに消えたので私は目を開けることをしなかったがすぐに二度目の違和感を覚えたので私はぱっと目を開けた。

どうやら、何かに光が反射して丁度私のまぶたの上に光が当たっているのだった。

最近の女性は電車内で化粧をするという人も多々いるのでおそらく化粧に使っている鏡の光が反射しているんだろうと思った。

私は電車内でのそのような行いが良いこととは思われないが特に怒

るほどのことではないと思っただし、私が少し顔をずらせば事足りると思っただのでその光が出ていると思われるところに視線を送った。すると私がイメージしていたものとはまったく異なる人物が私の視線の先にいた。大柄で屈強な体格、服装は半袖の赤のＴシャツを着ており下にはどこにでもあるような青っぽい色のジーパンを履いている。

私は想像してたものと現実のものとの違いぎよつとしたが、では私に光を当てていたものはなんだったのだろうか。

男とその周辺にさり気なく視線を送ったがそれらしき物は見当たらなかった。

はて、私の勘違いか、などと思っているとまたキラツと光が反射した。今度こそは見つけてやろうと視線を送るとやっとその正体が分かった。

男は右手に黒い小さなバッグを持っているのだがそのファスナーは開いておりそれがむき出しとなっていた。

それはキラキラと光を放っており美しくも感じられたが紛れもなく鋭利な刃物であった。

私は一瞬ドキツとしたが最近の若者は法律等は関係なく護身用といった名目で刃物を持ち歩く者もいるという。周りの人々はまったく気付いていないようで、男も自分のバッグが開いていることに気付いていないようだ。

しかし次の出来事がかかってないほどに私の背筋を凍らせた。

まるで背中から冷えた水をぶっかけたようで、周りの人々が汗ばむ中逆に私の体は冷たくなっていった。男は窓の景色を眺めているようだったが、ふと下を見ることで自分のバッグが開いていることに気付いたようだった。

それに気付いた男はてっきりファスナーを閉めるものと思っていたが違っていた。男はバッグの中に手をつ突っ込むと中にある刃物を握り締めたようだった。

まさか刃物を取り出すつもりではないかと思いきりとさせられ

だが彼はそれをしなかった。しかし、それ以上に恐ろしいものを私は見てしまったのだ。

彼は下を向き、刃物を握りながらにんまりと笑ったのだ。私にはそれが何の笑みなのか分からなかったが少なくとも悪意のある笑みであることは分かったし、あの刃物は護身用の物でないことはよくわかった。彼はしばらく笑っていたがどうやら目的地に着いたらしく素早い動作でファスナーを閉じまるで何事も無かったように電車を降りていった。

あまりに奇怪な状況に私は身震いしたし、男が電車から降りてもしばらくその出来事は脳裏からこびりついて離れることはなかった。男の動向は気になりはしたが私は勤務先の駅に着くと乗客をかきわけ下車した。その後駅から出て会社に歩いていく間も男のあの表情を忘れることはできなかった。電車内での出来事は私の脳裏にこびりつき、私の仕事への集中を妨げた。終業時間になると私は会社を出て、駅へと向かった。

「まさか、帰りは乗ってはいまい。」

私は今朝の、まるで悪魔の様な笑みを浮かべた男の事を思い出しぞつとした。だが、その一方であの男をもう一度みたいという不謹慎かもしれないが期待感みたいなものも持っていた。退屈な日常を送っていた私にとってあの男の登場は平凡な日常を刺激のあるものへと変化させる可能性があるのではないかと思っただ。

しかしその期待は空振りに終わった。それもそのはず、男と私が同じ電車の同じ車両に乗る確率はかなり低かった。予想どおりのことだったのであまり落胆することもなかったが、私のはあの男が電車を降りた後に何をしたのかがとても気になっていた。家に着いても私はあの男が気になっていた。

一人暮らしの私にとって娯楽といえばテレビぐらいしかなく、またあまり社交的ではない私はどこかに出かけるわけもなく家でじっとしている毎日だった。そのせいかあの男の存在は日常の中の非日常

と言えるだろう。私はあれこれ考えてみたがいくら考えてもそれは空想でしかないだろう。テレビをみてもあの男が降りた場所周辺での事件の報道は一切なされなかった。

「やはり実際に調べるしかないか。」

「私は明日、今朝と同時刻に同じ車両に乗ることにした。」

しかし、興味をもつという事は、こうも人間を変えてしまうものだろうか。

無気力な人間であった私が明日に期待している、明日が来るのを待ち望んでいるのだから。

翌朝、私はいつもより30分ほど早く起きた。

予定の時刻に遅れないように、いつもの様に顔を洗い、ご飯を食べ、歯を磨き、スーツに着替えた。

かなり時間が余ってしまったのでテレビを見ながら時間をつぶした。今朝もあの男に関する報道は一切なかった。

時間になったので私は家を出た。

今日は雨が降るらしいので傘を持って早足で駅まで向かう。なるほど空は雲に覆われており灰色の景色が頭上に広がっている。

駅に着くまでにはぽつぽつと雨が降り始めていた。私が改札を通り、ホームに飛び込む頃には、外はどしゃぶりになってしまい、続々と頭や体を濡らした人達が駅に入ってきている。「まもなくだな。」

「不安と期待が入り交じる中で私はホームの電光掲示板から電車の到着時刻を見ていたのだが、さりげなく少し視線を下げると、目を疑うような光景を目にした。」

「あの男だ。」

「信じられないことにあの男がいたのだ。昨日と服装こそ違えど見間違えるはずもない、あの男だった。男は私が並んでいる列の一つ右の列に並んでいた。私は男と同じ列に並ぼうかと考えたが、あまり接近すると私が危険にさらされるかもしれないと思い、

とりあえず今並んでいる列から電車に乗り込んだ。　電車に乗り込んですぐに男が乗り込んだ方を見た。

男は乗客に押し込まれたらしくさつきよりも私の近くに来ていた。雨で髪は濡れ前髪で目は隠れている。

しかし口には昨日の様に不気味な笑みを浮かべていた。

乗客もそのあまりの不気味さに気付き男の周りには少しスペースが空いていた。

男はまた刃物を入れているだろうバッグに手を突っ込んでいた。

あまりに不気味な光景に車両を変えたり一度電車を降りてしまう人もいた。

そうしているうちに、昨日男が降りた駅に着いた。

男は案の定、人込みをかきわけ電車から降りた。

周りの人間には安堵の表情をうかがいしることもできたのだが私は違った。

「あの男はどこへ行くんだろう。」

電車のドアが閉まる直前私は反射的に電車から降りてしまった。

その瞬間電車のドアは閉まり、私を置いて発車してしまった。

次の電車に乗っても間に合わない。

まだ欠勤や遅刻もしたことがなかったが、初めて仮病を使い会社を休んだ。

上司は私の真面目な仕事ぶりを知っており、休むことを了承してくれた。

私は急いで改札を飛び出すと周りを見回した。

すると、私の視線の先には期待どおりの人物がいた。

男はどうぞやらどこかへ向かっているようだった。

私は男に気付かれないように後を付けた。

まるで探偵ごっこをしているように壁に張りつき足音を殺し、尾行した。

途中通行人には変な顔をされたりもしたが気にはならなかった。恐いもの見たさが私を突き動かす原動力となっていた。

しばらく歩くと男は廃ビルに入ってしまった。五階建てで不気味な雰囲気を漂わせている。さすがに私もそこに入ろうか迷ってしまった。

私がいかに平凡な男であろうかが人間には五感というものがあり、さらに敏感だろうが鈍感だろうが第六感と言うものが私に語り掛けてくる。「ここはまずい。ここから先は自分が入るべきではない。

「頭の中は引き返すべきか、それとも男の招待を見極めるべきか、この二つの考えが戦っていた。しかし天候が荒れ、雷雨となり、私は自分の意志というよりも天候に導かれるようにして男が入ったビルに飛び込んだ。中は埃がたまっており、また使われなくなった。デスクやイスなどが放り投げられている。私は息を殺し、足音を殺し、周りを見渡した。すると埃が積もった地面に男の物と思われる足跡が付いていた。見るとその足跡は規則正しい間隔で階段まで続いていた。それを辿っていくと二階、三階、四階と通り過ぎ、最上階である五階に着いた。五階は何個かの部屋に別れており足跡は一番奥の部屋まで続いているようだった。

用心しながらそれを辿った。ついにあの男の正体がわかると、期待に胸を膨らましている自分がある。

「えっ・・・？」 用心深く足跡を辿っていた私は一瞬訳が分からなくなった。足跡がないのだ。

奥まで続いていると思われた足跡はぶつくりと途切れている。その瞬間私の背中を凍り付くような寒気が襲ってきた。

すると階段の方から音が聞こえてきた。

「コツコツコツ。」 私はいつ男を追い越したのだ

るうか。階段は一つ、男が透明人間でもないかぎりこんなことは不可能だった。「ともかく今は隠れなければ。」

「確実に男は迫ってきている。不気味な足跡を響かせて。」

辺りを見渡すといくつか隠れる部屋はある。私はその一室に隠れて男の来るのを待つ。

足音は止み男はどうやら侵入者を探しているようだった。「バンッ！」 力強く

扉が開けられる。男は私が隠れている部屋に入ってきた。一歩ずつだが確実に私が隠れているほうに近づいてくる。

「ドクンドクン。」 こんなに心臓の鼓動が高鳴るのは初めてだ。額からは冷や汗が流れ、私の緊張はピークに達した。

男は私の隠れている近くで立ち止まっていたが、私を見つけられなかったのか、足音は少しずつ遠くなりついには部屋から出ていった。「助かった……」 額の汗を拭い、しばらく耳を澄ました。だが足音は聞こえない。

まるで少年時代友達としたかくれんぼのようだった。だが子供の遊びとはわけが違うのだ。見つければ確実に私は死体となり、動かぬただの肉塊になってしまうのだ。

私は忍び足で部屋を出ると男の大きな足跡をたどっていった。大きな足跡はこの階の一番奥の部屋まで続いている。半開きになっている扉の間から覗き込む。

「あれは……」 男はあのナイフを片手に大きなテーブルの上にある何かに突き刺している。男が懐中電灯で明かりを照らすとその正体が判明した。私は声が出なかった。男が

そのものにナイフを突き刺すたびに、真っ赤な液体を浴びる男の顔はあの悪魔の様な笑顔であった。男は手際よくも人間であった。その物体を細かく切り刻むと、その一つ一つをカメラで撮影しはじめた。「カシャカシャ」 静かな建物内でカメラの音だけが不気味に響き渡る。異常な光景だったがさらにその後の男の行動は常軌を逸するものであった。

男は切り刻んだパーツを全て力

メラに収めると、ある一つのパーツを手にとった。かつて人間であつた物体はこの部位であるかも分からないくらい細かく刻まれ、また赤黒い不気味な色であつた。男はそれを大きく開けた口にほおりこんだ。そしてまるで大好物のものを食べるようにもぐもぐと噛み始めた。「人じゃない・・・」私はあまりにひどいその光景に吐き気をもよおした。

「もうここにはいられない。警察に話さなくては。」

男から目を背け吐き気をなんとか我慢した私は階段のある方に一歩踏み出した。「待ちなよ。」  
「何か私の右腕を掴んだ。振り替えると全身に返り血を浴びた男が半開きの扉から手を伸ばし私の右腕をしっかりと掴んでいた。私は逃げる間もなく部屋に引きずり込まれた。男は私を引きずり込むとさっきの肉塊が置いてあるテーブルに私の体を固定した。」

男は無表情で私に語り掛けてきた。

「あんたも俺に興味を持ってくれたんだね。」意味が分からないことを言い始めた男に対して私は質問をした。「なぜこんなことをするんだ？」

「男は私の顔にナイフを当てて話し始めた。」

「俺は今まで出会った人間全てに無視されてきた。奴らは俺をいないものとしていた。空気と同じように扱っていた。」男は少し怒つたような声で話し続けた。

「だから俺に関心を持たせてやった。奴らをさらい、ナイフを突き刺した。すると奴らは初めて俺に興味を持った。」

男は私の足にいきなりナイフを突き刺した。「ぐわあああ！！」大動脈を傷つけたようで血しぶきが噴水のように吹き出した。あまりの激痛で私は気を失いそうになった。

「こうすると皆言うんだ。助けてくれて。」  
「こうすると俺に初めて興味を持ってくれるんだよ。」  
「そして殺した。奴らの目は俺の方を一度もそらすことはなかったよ。こうなる前は俺のことを見ることもなんてなかったのにさ。」  
男の悪魔の様な笑みは返り血を浴びて本当の悪魔のようだった。「何故、その後あん

なことをするんだ。」 私はこちらで殺されるのだろうか。せ

めて男の悪魔のごとき所業の全貌をこの耳で聞いておきたかった。

「殺したとき思ったんだ。本当に俺に興味を持ってくれたのかなって。そしたら殺したときに吹き出した血が俺の口の中に入ってた。その時理解したんだ。こいつらは俺に興味を持ってくれたんだって。」

「私が恐怖で引きつった顔をしていると男は私の足から吹き出した血をペロリと舐めたした。」

「ほらっ、あんたも俺に興味を持ってるだろ。」

男は嬉しそうに笑みを浮かべた。「その後、体を切り刻んで食べてみた。そしたらそいつらが、俺に興味を持っていたということがさらによくわかった。細胞が感じるって言うのかな。」

「それで俺に興味を持ってくれるやつを探そうと思って電車に乗ったんだ。そこにあるモノの元の人もそうだったしね。俺はこうすることで社会との繋がりを実感できるんだ。」

男は話し終わると私の胸にナイフを突き刺した。ナイフが肺に突き刺さり、私は呼吸ができなくなった。目の前が霞む。意識が遠退く。男はこれから人間を殺し食べ続けるのだろうか。自分の存在を確認するために。「うまいっ！！あの人も俺にこんなに興味を持ってくれてたんだな。」

「ヒーツ！！」

「おやっ、また俺に興味を持った人が来てくれたかな？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1925c/>

---

誘惑がもたらすもの

2010年10月17日01時49分発行